

足軽（歩兵）の生活のさまざまな側面

江戸時代（1603—1867）、日本には大きく分けて武士、農民、職人、商人の4つの社会階級がありました。武士を含むすべての人々は、階級の厳しい社会規範に縛られていました。しかし、これらの足軽（歩兵）の生活の詳細が示すように、その中にもある程度の柔軟性と社会移動の機会がありました。

吉報は玄関から：

金沢の足軽コミュニティには、特別な慣習がありました。上級の者が足軽を召喚したいときは、前日に使いを足軽の住居に送りました。召喚の内容次第で、使いがメッセージを運ぶ方法は異なりました。良いニュースだったら、特使は「玄関」と呼ばれる公式な入り口から入って、メッセージの内容を告げました。悪いニュースの場合は、流しのある勝手口から伝えられました。このようにして、足軽の家族は、良いニュースか悪いニュースかを、使いの入り方で知ることができました。

江戸勤番における俸禄の良さ：

江戸時代（1603—1867）には、徳川の軍事政権（将軍）が、「参勤交代」という制度を導入しました。他の藩の独立性を弱めたり、大名の資源を減らしたりして、自らに権力を集中させるためです。この制度では、大名は藩と徳川の首都である江戸（東京）を交互に行き来する必要がありました。江戸には、彼らは妻や子供を住ませる屋敷を設けることを求められました。詳細は藩によって異なりますが、加賀藩（金沢を中心とする封建時代の金沢）の場合、大名は1年ごとに江戸と自分の藩を行き来することを求められました。大名にとっては、江戸への旅は費用も時間がかかる業務でした。彼らは一人で旅行したわけではありません。兵士たちや召使、およびその他の様々な家来の大勢の付き添いを伴いました。当時の日本最大級で最も豊かな藩の一つだった加賀藩の大名の場合、旅のお供は少なくとも2,000人、最大で4000人にも及んだと言われています。

皮肉なことに、「参勤交代」の試練にもかかわらず、大名とともに旅した足軽は、大きな負担から解放されました。故郷では軍事業務と、上級武士に仕える義務を求められましたが、江戸での仕事は簡単でした。しばしば、江戸における彼らの職務は、藩邸の門で警備するだけでよかったのです。江戸での仕事は、さらに報酬も良かったです。そのため、足軽の多くは熱心に大名の江戸行きに同行したがりました。

お金次第で足軽になれた：

原則として、足軽は世襲制ではありませんでした。しかし、ほとんどの場合、子どもたちは両親の跡を継いで足軽になりました。加賀藩の足軽の定数は決まっていたので、足軽になれるのは、ある足軽が引退するか、死去するかのどちらかの場合だけでした。この場合、足軽になりたい子どもは、足軽階級に推薦されることが必要でした。

足軽に跡継ぎの子供がない場合は、後継者を見つけるために「階級」を売ることができました。これは、非公式の養子縁組のシステムを作り出しました。つまり、商人や農民たちは一定の金額で彼らの子供のために足軽の階級を買い、足軽の家に養子縁組させられたということです。

原則として、江戸時代は、階級が固定され社会的流動性はありませんでした。しかし、足軽になりたい者にとっては、ある程度の流動性を許す小さな抜け穴がありました。

足軽組地は桃の組：

加賀藩の足軽居住区の一部には、桃の木が一面に咲く区がありました。加賀藩の慣習に基づき、これらの地区にある家は一戸建てでしたが、この地域の家はまとめて「桃の組」と呼ばれました。

他の藩では、一般的に、足輕は、庭付き一戸建ての家に住むことができませんでした。彼らは桃のような木を植えることはできませんでした。この「桃の組」のエピソードは、金沢の足輕が他の地域の足輕と比較して比較的良い生活を送っていることを示しています。